

入選 高学年の部

おじいちゃんと歩いた里山

ぼくのおじいちゃんは櫻守でした。宝塚の亦楽山えきらくさんという里山の桜を守り育てていました。ぼくの生まれた1999年に、おじいちゃんたちが「櫻守の会」を立ち上げ活動してきました。

二年前、おじいちゃんの七十七才のお祝いの時、いとこ達みんなで亦楽山えきらくさんへ行きました。おじいちゃんは足が速いので、ぼくはその後を一生けん命息を切らしながら登っていました。おじいちゃんは山のことをいろいろと教えてくれました。木の名前、虫の特徴、山道の歩き方・・・ぼくはいつも感心していました。おじいちゃんは、山のことを何でも知っている、ぼくにとつての「山の博士」です。

でも、それがぼくとおじいちゃんの最後の山登りでした。実はその時おじいちゃんの肺にかけがあるとお医者さんから言われていて、山登りの後しばらくして、おじいちゃんは肺を半分以上もとつてしまったからです。

おじいちゃんが入院している病院へぼくがお見まいに行つた時、おじいちゃんはとてもやせていました。足がとても細く、歩けるかなあと心配になりました。ベッドの周りにいろんな機械があり、それとおじいちゃんはチューブでつながっていました。散歩の時も車いすで病院の周りを回るくらいしかできなくなっていました。「おじいちゃんは今もう山には行けない。」と聞いた晩、おばあちゃんが作ってくれたごはんもおいしく感

神奈川県

川崎市立南菅小学校六年

清水 晟志

じられませんでした。

その晩ぼくはなかなかむれませんでした。この日は病院で見たおじいちゃんと、半年前元気にぼくの前を歩いていたおじいちゃんが同じ人とは思えなくて、とてもショックでした。

帰りの新幹線の中で、ぼくはおじいちゃんと最後に山に行つた日を思い出していました。あの時、ぼくはおじいちゃんに総合で学習したばかりの里山のことを話していました・・・「おじいちゃん、里山では人の手が加えられたからこそ生きていける動物がいるんだよね。」「人の手が加えられない山の木より、里山の木の方がずっと大きく成長するんだよね。」

ぼくの言葉に、おじいちゃんは「そうそう」と目を細めていました。おじいちゃんは、子供達に里山の楽しさを伝える活動もしていたので、孫のぼくが里山に興味があるのを見てうれしかったのでしょう。

あれからリハビリをして、おじいちゃんはだいぶ元気になりました。でも酸素ボンベをつけているので、山での活動はもうできなくなつてしまい、櫻守も引退してしまいました。

今年の夏休み、おじいちゃんに会つたらこう言うつもりです。「おじいちゃん、櫻守おつかれ様！おじいちゃんといっしょに登つた里山は楽しかったよ。今すぐおじいちゃんの手してきたような事はできないけれど、里山を守つていこうという気持ちをぼくもずっと大切にしていこうよ。」